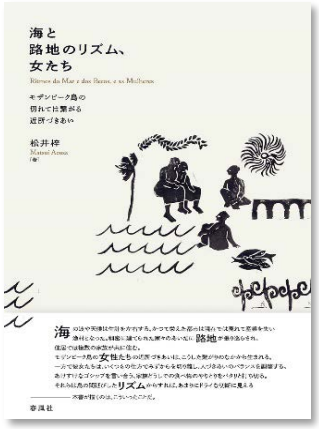

海と路地のリズム、女たち
――モザンビーク島の切れては繋がる近所づきあい――

松井 梓　著

横浜　春風社　2024 年 338p.

本書の舞台は、モザンビークの国名の由来でもあり、UNESCO の世界遺産にも登録されているモザンビーク島である。モザンビーク北部沿岸に位置する南北 3 キロメートル、東西 500 メートルの小さな島である。本書が描き出すのはその中でも半径 20 メートルの日常で展開される人間関係の民族誌である。本書は、著者が 2022 年に京都大学に提出した博士論文がもとになっている。

島の役割は時代ごとに変遷を遂げながらも、眼前に広がる海という自然の豊かさは島民の生活に経済的安定性を与え、それを著者は「島の間延びしたリズム」と描写する。他方、そのリズムとは対照的に、住民女性の間では、軒先 3 軒程度の近隣で目まぐるしく繰り広げられる食の授受と、明け透けなゴシップという名の「儀礼的な会話」を伴う近所づきあいが展開される。その上、こうした関係性さえ頻繁に変転していくというのだから、多くの読者は動揺するだろう。

しかし、著者はその「儀礼的な会話」と関係の流動性に注目する。この日常は、「両者が相互の合意に基づいてその真偽を問い詰めない『ことにし』つつ（中略）その場を盛り上げて世界を構築する」（p.310）ことで成り立っている。そうした「骨の折れる仕事」をやってのけるモザンビーク島の女性たちは、著者が言うように、侮れない高度な技術を身体化している。

本書の研究対象地域はモザンビーク北部の母系社会の民族集団マクアの中でも、スワヒリ文化の影響の色濃い沿岸部、つまりイスラーム法が存在する空間でもある。母系社会とイスラームの相対する価値規範の狭間で、本書では影の薄い男性たちはどうしているのか興味は尽きない。さらに興味深いのは、この地区の住民が頻繁に転居する流動性の高さ、そして島外からの転入者も、やがて関係性を頻繁に変転させるという島の流儀に馴染んでいくという点だ。著者はそれが生活の中での「身構えとして身体化」され、この島の女性は濃密な近所づきあいの関係のなかに〈個〉を確立しているのだという。こうした著者の視角は読者に、アフリカ、あるいはその他の社会における〈個〉を捉え直すきっかけを提供している。

本書全体の構成も、インド洋から半径 20 メートルの島の日常に絞り込むスケールの操作が巧みで読みやすい。また各章の間に挿入された「幕間のエッセイ」は、舞台となった島の街路を吹き抜ける風のように島の雰囲気を伝えている。著者が狙った読者による疑似体験の効果は絶大だ。ぜひ一読して、この島の濃密な空気と風通しの良さを感じてほしい。

網中　昭世（あみなか・あきよ／アジア経済研究所）

© IDE-JETRO 2024